

# 赤いえり巻き

小川未明

青空文庫



お花<sup>はな</sup>が、東<sup>とうきよう</sup>京<sup>きやう</sup>へ奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>にくるときに、姉<sup>ねえ</sup>さんはなにを妹<sup>いもうと</sup>に買<sup>か</sup>つてやろうかと考<sup>かん</sup>えまし<sup>が</sup>た。二人<sup>ふたり</sup>は遠<sup>とお</sup>く離<sup>はな</sup>れてしまわなければなりません。お花<sup>はな</sup>は、まだ見<sup>み</sup>ないにぎやかな、美<sup>うつく</sup>しいものや、楽<sup>たの</sup>しいことのたくさんある都<sup>みやこ</sup>へゆくことは、なんとなくうれしかったけれど、子<sup>こ</sup>供<sup>ども</sup>の時<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>から、親<sup>した</sup>しんだ、林<sup>はやし</sup>や、野<sup>の</sup>や、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>の村<sup>むら</sup>に別<sup>わか</sup>れることが悲<sup>かな</sup>しかったのです。

姉<sup>あね</sup>は、かつて、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>も一<sup>ど</sup>度<sup>みやこ</sup>、都<sup>みやこ</sup>へいつてみたいと心<sup>こころ</sup>にあこがれたことがありました。しかし、ついでに出<sup>で</sup>る機<sup>き</sup>会<sup>かい</sup>がなくてすぎてしまいました。そして、もう奉<sup>ほう</sup>公<sup>こう</sup>に出<sup>で</sup>るには、あまり年<sup>とし</sup>をとつてしまったので、自<sup>じ</sup>分<sup>ぶん</sup>は、村<sup>むら</sup>に残<sup>のこ</sup>って圃<sup>たんぼ</sup>に出<sup>で</sup>て、くわをとつて働<sup>はたら</sup>く

ことにいたしました。

「なにを妹に、買ってやったらいいだろう。」

姉は、ひとりで働きながら思つたのです。

たとえ、妹は、華やかな都へゆくのにしろ、家を離れるという

ことは、姉にはさびしいことでした。そして知らぬところへいつ

て、遠くみんなから別れて、一人で生活するということとは、ど

んなにか、心細いことであろうと思われると、妹がかわいそ

うになりました。

「せめて、いつまでも妹の身につくものを買ってやりたい。」と、

姉は思いました。

このとき、そばの林の枝にとまって、赤いすかが鳴いていま

した。もう、秋もふけていました。林をおとずれる風は荒く、空の雲ゆきは早かった。そして、ところどころに、青ガラスのような冴えた色が見えたのです。

姉は、この秋から、冬にかけてくる小鳥をめずらしそうに見て

いるうちに、ふと、心に浮かんだのは、この赤い鳥の毛のような、

真っ赤な色のえり巻きを妹に買ってやろうということでした。東

京は、雪は、あまりないが、冬は風が寒いと聞いている。外

へ用事に出かけるのにも、えり巻きがなくてはならないだろう。

赤いえり巻きを買ってやったら、妹も、さぞ喜ぶにちがいないと

考えました。

姉は、町へ出ました。そして、洋品店で、赤いえり巻きを買

つて家に帰り、それを妹に与えたのであります。

「まあ、きれいなえり巻きだこと。」といつて、妹は目をみはりました。

「私は、考えたのだよ、東京のステーションに降りたとき、この真っ赤なえり巻きをしていったら、迎えに出てくださる方におまえだということがわかるだろうと思つて……。それに、この赤い色は、悪い色でないと思つたのだから……。」と、姉はいいました。

\* \* \* \* \*

お花が、上野駅へ着いたときに、彼女が心配したほどのこともなく、すぐに、出迎えにきていた奥さまや、坊ちゃんたち

の目にとまったのです。そのはずで、赤いえり巻きが、たくさん  
 汽車から降りた人たちの間でも、目立ったからでした。ちようど、  
 朝日の光は、繁華な街の建物のいただきを越して、プラツトホ  
 ームに流れていきましたが、そこへ、日に焼けた赤い顔の少女  
 が、真つ赤なえり巻きをして歩いてきたので、赤い金魚か赤い  
 着物をきたさるのようにな、それが見えたのも不思議がありません。  
 口の悪い、坊ちゃんたちは、お花に、金魚というあだ名をつ  
 けました。けれど、お花は、そんなことを気にかけるような性  
 質でなく、いつも、田舎にいた時分のように、いきいきしてい  
 ました。そして、みんなから、かわいがられました。

「お花、おまえは早のみこみで、こちらのいうことを、半分し

か聞きかないから、そんなまちがいをするのだよ。」と、奥おくさまからいわれることもありました。

ほんとうに、彼かのじよ女によは、そそっかしやで、よく、茶ちやわんを壊こわしたり、たなからものを落おとしたりしました。

「また、お花はなが、なにか落おとした。」といつて、しまいには、小こ言ごとをいうよりか、みんなは、それが愛あい嬌きやうになつて、おかしがつて笑わらつたのです。

それほど、彼かのじよ女によは、罪つみのない少しやう女じよでした。

「お花はなは、東とう京きやうがいいか、それとも田いな舎なかがいいかい。」と、家うちのものが、聞ききました。

彼かのじよ女によは、すぐ返へん事じをせず、笑わらつていましたが、二くつろの黒くろ



い目をかがやかしながら、

「おら、田舎がいい。」と答えました。

「どうして？」と、家の人たちは、いいましたが、こう聞くまでもなく、華やかな自然が目の前に開けて、鳥のように自由に駈けまわったであろう彼女の姿を想像すると、なんとなく彼女が不憫に感ぜられたのであります。

ほんとうに、東京の冬は、雪こそ降らないが寒かった。彼女は、使いに出るのに、姉さんが、こちらへくる時分に買ってくれた、赤いえり巻きを忘れずにしていききました。それには、なつかしい姉のまごころがこもっていると思われたから……。田舎から、手紙のくるたびに、彼女は、目をうるませていました。

「お花<sup>はな</sup>は、あの赤<sup>あか</sup>いえり巻き<sup>ま</sup>が、たいへんに気<sup>き</sup>にいつているらしいんですよ。」

こう、奥<sup>おく</sup>さまは、主人<sup>しゅじん</sup>にいわれたこともあります。

「あのえり巻き<sup>ま</sup>をして、汽車<sup>きしゃ</sup>から降<sup>お</sup>りたとき、真<sup>ま</sup>つ赤<sup>か</sup>だったね。」と、子供<sup>こども</sup>らは思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>して、お母<sup>かあ</sup>さんにいいました。

「なに、もうすこしたつと、お花<sup>はな</sup>もすつかり東<sup>とうきよう</sup>京<sup>こ</sup>っ子<sup>こ</sup>になつてしまうから。」と、そのとき、お父<sup>とう</sup>さんはいわれました。

\* \* \* \* \*

ある日<sup>ひ</sup>、小<sup>ちい</sup>さな子供<sup>こども</sup>をつれて外<sup>そと</sup>へ出<sup>で</sup>たお花<sup>はな</sup>が、なかなか帰<sup>かえ</sup>つてこないの、家<sup>うち</sup>じゆうが大<sup>おお</sup>騒<sup>さわ</sup>ぎをしたことがあります。

「どこへいったのだろう。」

みんなは、お花をさがし歩きました。しかし、いつも近所にいるのが、その日にかぎって、どこへいったか、その影が見えませんでした。

「町の方へでもいったのかもしれない。小さなをつれて、けがでもさしたら困ってしまうが……。」

こう、家の人たちはいつて、心配しました。それから、町のにぎやかな通りの方へさがしにゆきました。すると人集まりのしている活動写真館の前に、真つ赤なえり巻きが、黒い人波にもまれながら、はつきりと見られたのです。

「あすこにいるのは、お花だろう……。」「

はたして、彼女でありました。

家に帰つてから、この後、こんなことがあつてはならないと聞かされた後で、

「赤いえり巻きをしているから、わかつていい。」といわれると、わたし、赤いえり巻きなんか、いやになつた。」と、お花はいいました。

「なぜ、きれいでいいじゃないか。それに、おまえの姉さんが、買つてくださったのだから……。」と、家のものがいいますと、お花は、下を向いてだまつていました。

お花には、もうだいぶ、給金がたまつたころであります。

このごろは、都会の娘の持ちそうなものがほしくなつたとみえて、白粉や、香油のびんなども、いつのまにか買ったものが、戸だ

なの中なかにかくしてありました。

ある、風かぜの吹ふく日ひのこと、彼女かのじよは外そとから帰かえると、ちがった水み色ずいろの流りゆうこう行なの長ながえり巻まきをしていました。

「そんないいのを買かったのかい。赤あかいえり巻まきはどうしたの？」  
と、奥おくさまは聞きかれたのです。

彼女かのじよは、顔かおを赤あかくして、笑わらっていたが、

「汚よごしたので、さおにかけておきましたら、とんびがさらって  
いてしまいました。」と、顔かおをあげて答こたえました。

「とんびが？ ああかの赤あかいえり巻まきをさらっていったの？」と、奥おく  
さまは笑わらわれました。

「はい、昨日きのうのお昼ひるごろ、さらっていったんです。」

みんなは、顔を見合つて笑いました。

「ほんとうかい？」

「うそだろう……。いやになったから、捨ててしまったのだろう……。」

「いいえ、ほんとうです。」と、お花は答えました。

田舎の姉が、しんせつに買つてくれたものを、たとえ捨てたにしろ、捨てたとはいわれなかつた。とんびは、よくものをさらつてゆく。だから、とんびがさらつていったといつたら、だれでもしかたがないと思つたからであります。

子供たちだけは、お花のいったことをほんとうだと信じました。そして、大人たちは、お花はお花らしいものだというものだといつ

て、笑つたのであります。

\* \* \* \* \*

ちようど二年めの春であります。お花の姉が、病氣にかつたので、お花は、田舎へ帰ることになりました。もう、そのころは、彼女は、東京のほうが、田舎よりもよかつたので、帰るのをいやがりました。

「また都合がついて、出てこられるようになったらおいで。」と、家の人々は、お花の帰るのを惜しんだのでした。

彼女は、ふたたび田舎の人となつてしまつた。その後、たよりがありません。東京の夏の空に赤い雲が、旗のようにただよつて見えると、

「お花のえり巻きのような雲だね。」と、坊ちゃんがたは、空を仰いでいました。

「ほんとうに、とんびがさらって行って、捨てていったのかもしれないよ。」

赤いえり巻きのような雲は、高い煙突の上に、また光った塔の上に、風に吹かれて、ただよっていましたが、また、いつのまにか消えてしまいました。

こうして、今年の夏も、暮れてゆくのでした。そして、北の方の田舎には、もう秋がきたのです。木枯らしが、海の上を吹き、野を吹き、林を吹きました。その時分になると、真っ赤ないすが、どこからか飛んできて、木の枝にとまって鳴いたのです。



もし、これをお花<sup>はな</sup>が、圃<sup>たんぼ</sup>に出<sup>で</sup>て見<sup>み</sup>たなら、かならず、自分<sup>じぶん</sup>のな  
くなつた赤<sup>あか</sup>いえり巻<sup>ま</sup>きを思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>し、東<sup>とうき</sup>京<sup>きやう</sup>の坊<sup>ぼつ</sup>ちやんたちのこ  
とを思<sup>おも</sup>い出<sup>だ</sup>したでありますよう。



# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 7」講談社

1977（昭和52）年5月10日第1刷発行

1982（昭和57）年9月10日第6刷発行

底本の親本：「未明童話集5」丸善

1931（昭和6）年7月10日発行

初出：「童話研究」

1928（昭和3）年9月

※表題は底本では、「赤《あか》いえり巻《ま》き」となっています。

※初出時の表題は「赤い襟巻」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：きゆうり

2019年9月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 赤いえり巻き

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>